

知覚経験は個物を含むのか

岡部 幹伸 (Mikinobu Okabe)

慶應義塾大学

知覚経験は世界のなかの対象と主体を関係させ、世界の事実やそれを構成している個物についての知識を可能にしている。そして、そのためには知覚の正確性条件は個物を含んでいなければならないように思われる。たとえば、識別不可能な赤いトマトが主体の正面と右にそれぞれあるとする。その状況で主体がものが 90° ずれて見えるメガネをかけているとすれば、主体はほんらい右にあるトマトを正面にあるものとして経験している。このようなとき主体の知覚経験は明らかに誤っているように思われるが、もし個物によって知覚の正確性条件を説明できないのなら、そのように言うことができなくなるのである。

しかし、知覚には個物は含まれておらず、知覚を構成するのは一般的要素のみであると考え人たちもいる (McGinn 1982; Davies 1992)。知覚が何らかの内容を持つという立場が正しいとすれば、知覚の内容は一般的なもの、普遍者、量化された内容といったもので尽きると考えられているのである。特に、知覚の志向説を取るならば、知覚の志向的内容には個物が含まれていないとする方が扱いやすいかもしれない。志向的内容という共通要素で知覚経験を分析するのであれば、個物は真正な知覚にだけ存在し、(真正でない) 幻覚の場合は存在しないからである。

それゆえ、本発表で扱う問題は、「知覚は個物を含むのか」というものである。本発表はその問いに肯定的に答えた上で知覚の理論は個物を扱うためにはどのようなものでなければならないか提言を与えることを目標とする。

知覚が個物についてのものであることを支持する論証はいくつかの種類に分けられるが、単称的内容による論証がもっとも基礎的であるという議論がある (Schellenberg 2018)。そのため、本発表では単称的内容がどのようなものか明らかにすることも目指したい。

結論として、そのように理解された単称的内容は知覚の内容に含まれなければならないが、知覚は個物を含むと本発表は主張する。その結果、ある種の選言説 (内容の選言説) に支持が与えられることになる。知覚内容に限ったこのような選言説は、選言説一般とは一応区別して考えることができるものである。それは、一時期のタイのような表象主義を支持する論者も受け入れることが可能なものである (Tye 2009)。内容の選言説が選言説一般への支持を与えることを主張する立場もあるが、本発表ではそれには慎重な立場を取り、個物による論証の射程を見極めたい。

参考文献

Burge, T., 1993, "Vision and Intentional Content", in *John Searle and his Critics*, E. LePore and R. Van Gulick (eds.), Oxford: Blackwell, pp. 195–213.

- Crane, T., 2011, The Singularity of Singular Thought, *Aristotelian Society Supplementary Volume*, Volume 85, Issue 1, pp. 21–43
- Davies, M., 1992, “Perceptual Content and Local Supervenience”, *Proceedings of the Aristotelian Society* (New Series), 92: 21–45.
- McGinn, C., 1982, *The Character of Mind*, Oxford: Oxford University Press.
- Schellenberg, S., 2018, *The Unity of Perception: Content, Consciousness, Evidence*, Oxford University Press.
- Soteriou, M., 2000, “The Particularity of Visual Perception”, *European Journal of Philosophy*, Vol. 8, No. 2, pp. 173–189.
- Tye, M., 2009, “The Admissible Contents of Visual Experience”, *The Philosophical Quarterly*, Vol. 59, No. 236, pp. 541–562.